

すばらしい漢字の訓読法

表音文字は、文字を創作できなかった民族が先進民族の文字を借りる時に必ず生ずる用法で、表語文字の代用品です。不便なのは当然であり、不便を承知で表音という手段に依っているのです。それでも長い間使用していると、so、sow、sew のような“表意化”が行われ、だんだん使いよくなって来ます。

しかし、そんな表意化では満足できなくて、外国の文字を自国語の表語文字にしてしまった民族が、この世界にただ一つあります。それは私たち日本民族で、その用法は漢字の訓読と呼ばれているものです。つまり、漢字の意味を借りて、その音を捨て、その音の代りにわが国の言葉の発音で読むのです。

この用法は、表音的用法と違って、桁違いに多くの漢字の知識を必要とします。極端に言えば、表音的用法では50字の漢字を知ればそれで足りませんが、この用法だと、二千、三千の漢字を理解できてもまだ不十分です。

しかし、私たちの先祖は、その労をいとわずあらゆる漢字についてその意味を調べ、その意味に当る国語の発音をその漢字に押し込んでしまいました。これで、外国の表語文字がそのままわが国の表語文

字になってしまったのです。

万葉集を見ますと

和我夜度爾 左加里爾散家留 宇梅能波奈知流倍久奈里奴 美牟必登聞我母

というように、漢字を表音文字として使って書かれています。これがいわゆる万葉仮名です。わが国の最も古い言葉は、すべてこのような表音文字である仮字で書かれています。

ところが、同じ万葉集でも、中期以後になりますと、

橘之 花散里乃 霍公鳥 片恋為乍 脇日四曾多寸

というような表語的用法が多くなってきています。表音的用法だけで書かれたものは、何度も繰返して読み、考えてみませんと、全くその意味がわかりません。ところが、後者の例のように表語的用法が多く用いられていると、実にその意味がわかりやすくなります。

私たちの先祖は、学習には安易でも、わかりにくい表音的用法に満足しないで、学習には大変でも一度身につければわかりやすくして便利な表語的用法を開拓し、ついに、二、三百年の間に外国の表語文字をわが国の表語文字にしてしまったのです。

このように、外国の表語文字を自分の国の表語文字に改造してしまったという例は、世界の長い歴史の中にも一、二あったに過ぎませ

ん。それも古い昔のことで、今はわが国以外には存在しません。外国の文字を、自分の国の表語文字として取り入れることは、理想的な最も良い方法であることがわかって、それが容易にできることではないからです。

ついでに言いますが、仮名は日本人の発明だと一般に信じられています。それは真実ではありません。中国人から教えられたものです。漢字を表音的に用いることは、中国では古くからあって、これを仮借と呼び、その用法による文字を仮借字と言います。略して仮字。字は国語では“な”と言いましたので“仮名”となったものです。

中国の仏典の中には、インドの言葉を表音的用法で書き表したものがたくさんありますが、それは全く万葉仮名と同じ用法です。中国ですでに長い間外国語を表記する場合に使用していた用法、仮借で日本語を表記することを日本人に教えてくれたものであることは、一点の疑う余地もありません。

だから、『日本人は、中国人も発明できなかつた表音文字を作り出した。これは日本人の優秀さを証明するものである』という論をなす者がよくいますが、それはとんでもない誤りです。ただ、仮名が中国からの帰化人に教えられたものであることは事実ですが、教えられなかつたとしても、また、日本人が優秀でなくても、日本人は仮名を作り出し

ただろうとは思いますが。それは、すでに述べましたように、表音文字は外国の文字を借りる時に必然的に生ずる用法であって、すべての後進民族が例外なしに作り出しているものですから。

従って、たとい日本人が仮名を発明したとしても、少しも自慢できることではありません。それに比べると、山をやまと読む用法は、今まで当然のここのように考えられていて、これに特別の価値を認める人がありませんでしたが、これこそは大いに誇ってよいことなのです。

もう一つ、ついでに言います。同じ漢字を用いている国に韓国があります。同じ外国の文字を使用してはいても、わが国と韓国とは大変な違いがあることです。わが国では漢字を国語を表す文字にしていますが、韓国では中国語を表す文字のままこれを取り入れています。韓国語を表すために漢字を借り入れたのではないことです。言わば、漢語に征服されたのです。わが国と違い、地続きの上に政治的な支配を度々受けたのですから、それは無理もないことだと思われま

す。ともあれ、同じ漢字を使用していると言っても、わが国の用法は韓国と中国とも大変な違いがあることを理解しなければなりません。従って、わが国の漢字の使用について、中国や韓国と同日に論ずることは慎まなければならないことです。